



# わたしの聖戦

女性が働くこと(パート)

100

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

## 「神様のレシピ」のすすめ

作家、伊坂幸太郎氏の作品には、「神様のレシピ」という言葉がよく登場する。「未来は神様のレシピで決まる」、つまり私達の人生は神様にゆだねられているのだという。

悪いことばかりが重なったときは、この「神様のレシピ」はよく効く。こんな結果になったのは自分のせいではないと思うと少しホッとすると、小さい頃は、努力したらそれなりの結果を得ることができた。学校の成績も運動も、頑張ればちゃんと見返りがあったもの。しかし年齢を重ねると、努力だけではどう

にもならないことに直面する。仕事や報酬や家族など、思い通りにはいかないことが増えてくる。そういうときは、これも「神様のレシピ」と思うと心が落ち着くかもしれない。

現在日本の死因は、トップのがんに続き、上から数えて第4位までが病気で占められている。では、5位は何か。

「不慮の事故」である。交通事故、窒息、転倒転落、溺死、中毒など、つまり「思わぬアクシデント」の総称で、年間4万人以上の人がこれで命を落としている。少し長い目でみると、大正12年の

関東大地震のときには7万人以上に跳ね上がったが、以後は突出した増減はなく、今に至っている。いずれの事故も交通事故と中毒を除けば、高齢になるにしたがって順調に、確実に増える傾向がある。ちなみに、このなかで明らかに減少傾



向にあるのは交通事故だけだ。平成7年には15、000人強の死亡者があったが、平成20年は7、500人とほぼ半減である。人生の上で理不尽なこととは数々あるが、死を意識する病気にかかったときと思いがけない事故に

遭遇したときが一番納得がいかないのではないだろうか。「なんで私が…」という思いがまず先に立つのが普通だろう。どんな不幸も自分の身に起こらなければ常に「ひとごと」である。無縁だと思っていた残酷なストーリーの主人公になると、人生は一変する。

もちろん、本人だけでなく家族や周囲の人々も同じこと。例えば我が子を病気や事故で失くしたりするのは、経験したことのない者でも胸が痛くなる。察して余りある苦悩だろう。これもみな「神様のレシピ」の結果なのだろうか。

「因果応報」という言葉がある。もとは仏教用語だが、前世や過去の行いによって果報があると、いうことで、本来は善い行いをしたときには善いことが、悪い行いをしたときには悪いことがあるといった意味だが、今ではもっぱら悪果のときにつ

かわれる。長く生きていると因果応報が必ずしも機能していないことも薄々わかってくる。どこからみても善い人が悲惨なくらい嫌な思いをしているのを、あるいは結構なワルがのうのうと生きている姿を見るにつけ、これまた理不尽な思いを抑えきれないことがある。

「神様のレシピ」は「因果応報」より、エッセンスとスパイスが効いている。神様のさじ加減、気まぐれ、いたずら、偶然、豊富な材料などなど微妙で不可思議な感覚に満ちている。悪いことが起こった時に「神様のレシピ」と心のなかで唱えて慰めにするのもよし、思いきって人生の転機を迎えたいとき、自分に勇気をくれるおまじないとして覚えておくのもまたおススメ。順風満帆の際にも過剰な自惚れの抑制剤になるだろう。

イラスト・三浦義雄  
タイトル・浅井健史